

危機言語・方言の保全と復興のためにーデータ整備と公開の価値ー

山田真寛（国立国語研究所）

6,000 から 7,000 ある世界の言語のうち、半数がこの 100 年のうちに確実に消滅し、最悪の場合、10 分の 1、20 分の 1 にまで減ると言われています。その背景には、人口の都市集中化により周辺地域の人口が減少してしまったこと、社会的・経済的理由により、人々が生まれ育った地域の言語や、中央の支配的な言語以外の言語の使用をやめてしまったこと、災害や紛争により人々が生まれた土地を離れなければならなくなったことなどの状況があります。

言語の消滅に関しては、次のような意見もあります。言語の消滅は社会変化の結果であって、しかたがない。あるいはもっと積極的に、言語は統一された方が便利だ。危機言語を守る必要はない…。

しかし、そもそも、なぜ、言語が多様になったのでしょうか。おそらく各地の地域言語は、地域の自然や人々の生活、ものの考え方などにもとづいて、長い時間をかけて形成されていったのだと思われまます。それらが消滅するということは、長い歴史の中で醸成された人類の智慧が失われてしまうことを意味します。生物の多様性が地球を豊かにしているのと同じように、言語の多様性は人類を豊かにしているのです。

このような状況に警鐘を鳴らしたのが、2009 年のユネスコの「消滅危機言語」の発表です。2,500 の消滅危機言語のリストの中には、日本で話されている 8 つの言語ーアイヌ語、八丈語、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語ーが含まれています。しかし、消滅が危惧されるのはこれだけではありません。これらの下位分類（方言）や、日本各地のほとんどの伝統的な方言もまた、消滅の危機にあります。これらを記録し、その価値を訴え、地域言語コミュニティの継承活動を支援することが、このプロジェクトの目的です。